

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

偶像崇拜摘発の狂騒と先住民社会： 1530年代末、メキシコ中央部の先住民異端審問の分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 致広, Kobayashi, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1157

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



偶像崇拜摘発の狂騒と先住民社会

—1530年代末、メキシコ中央部の先住民異端審問の分析—

小林 致 広

はじめに

「1539年と1549年、一部のスペイン人たちは、土地を掘り返し、埋葬されている遺体を暴き、さらには偶像を提出するインディオに対して報奨金を与えだした。…一部のインディオは脅されたすえ、実際には新しく作った偶像を(昔からの偶像と偽って)スペイン人に提出することもあった。そうすれば、彼らへの迫害が終わるとというのがその理由だった」

これはモトリニア師が、1539年から1540年にかけてメキシコ中央部で起きていた異常な状況について記した記述である(Motolinía 1989:138-39)。インディオの崇拜していた偶像を捏造してまで摘発しようとする異様なブームが起きていたことがわかる。この時期は、ヌエバ・エスパーニャ初代司教フアン・デ・スマラガ師による先住民への異端審問が行なわれていた時期と重なっている。

本論文の目的は、1530年代後半のメキシコ中央部における先住民族に対する異端審問の記録を分析することで、キリスト教という新しい宗教的規範が押し付けられた植民地期初期のアメリカ大陸の先住民社会がどのような変化を経験していたか、その一端を明らかにすることにある。分析の中心となるのは、初代司教スマラガ師による異端審問(*inquisición episcopal*)が実施された時期(1536～1543年)、偶像崇拜行為(*idolatría*)の嫌疑で摘発された先住民に対する異端審問の資料である。異端審問の資料にある偶像や偶像に対する儀礼などの記述を分析することにより、先住民の偶像崇拜摘発というキャンペーンの背景

で蠢く植民者側の思惑、改宗まもない先住民がおかれていた「どちらつかずの状態」で選択した行動のパターンを明らかにしたい。

I 先住民に対する異端審問の歴史的背景

1524年にメキシコに到着した12名のフランシスコ会修道士をはじめ、宗教関係者たちはメキシコ先住民に対するキリスト教改宗活動をさまざまな形で展開していった。翌年から、偶像崇拜を摘発する組織的な活動が始まり、先住民の宗教施設は異教徒の神殿(teocalli)、神々を象った彫像は偶像崇拜のシンボルと見なされ、つぎつぎ破壊され焼却されていった。同時に、修道士をはじめとする宗教関係者は、膨大な数の先住民に洗礼を施した。1530年代前半までの十年間、修道師は何千、何万という単位で先住民に洗礼を施した。1529年には、複数の女性を妻として娶っていた先住民の貴族男性に妻を一人に限定するように強制する婚姻の秘蹟も始まった。

チマルパインの第七報告書には、「1534年、ヌエバ・エスパーニャでは、我々の昔の先祖たちが誤って崇拝していた悪魔(diablosme)の神殿や偶像のすべてが破壊された(Chimalpáhin 1998,II:190-193)」という記述がある。これは、スマラガ師が初代司教として着任した1534年から、先住民が保有する偶像を摘発する活動がメキシコ中央部で大規模に始まったことを示唆する。

1536年、異端審問の権限を認められた司教スマラガによる先住民に対する異端審問が始まる。司教スマラガ師のもとでの先住民に対する異端審問でよく知られているのが、1539年11月、絞首火葬の刑に処されたカルロス・オメトチツインに対するものである¹⁾。チマルパインの記録は次のように記述している。

「この年、テツココ・アコルウァカンの領主ドン・カルロスが焼かれた。ネサウアルピリ・アカマピチトリの息子である彼は8年間統治した。それはファン・デ・スマラガ師の命令である。…その時、彼は偶像崇拜で告発された。なぜなら、大昔、先祖たちが崇拝していた悪魔の偶像を崇拝するのを止めなかったからである(Chimalpáhin 1998,II:198-99)」。

現在のメキシコにほぼ該当するヌエバ・エスパーニャでは、1570年代初頭に異端審問の制度が正式に確立する。それ以降、先住民に対する異端審問は原則として行なわれなくなった。先住民に対する異端審問が続いた時期は地域的な差があり、植民地化の遅れた周辺地域では、比較的遅くまで先住民に対する異端審問が行なわれていた。先住民に対する異端審問は、メキシコ中央部では1540年代初頭でほぼ終わっているが、オアハカ司教区では1540年代半ば、ユカタン司教区では1560年代初頭に行なわれている²⁾。

1. メキシコ中央部における先住民の異端審問

異端審問が制度化される以前、つまり司教が異端審問の権限を担っていた「司教による異端審問期」(1536～1570年)のメキシコ大司教区における先住民に対する異端審問の総数は26件である。その数は、この時期に行なわれた異端審問の総数464件の約5%でしかない。しかも、その3分の2近くは司教スマラガが異端審問長官を務めていた時期(1536～1543年)に集中している。しかも、偶像崇拜の嫌疑による先住民の異端審問はすべて司教スマラガの時期のものである。1540年代、第二代司教フランシスコ・テージョ・デ・サンドバル(1544～1557年)が扱った先住民の異端審問の案件は、魔術や迷信となっている。第三代司教アントニオ・デ・モントゥファルの時代(1557～1570年)の先住民に対する告発の罪状は、禁書書籍の窃盗とか、幼児虐待の共犯者という嫌疑である。

既往の研究では(Mariel de Ibáñez 1945; Buelna Serrano 2001)、スマラガ司教が異端審問長官を勤めた時期の先住民に対する異端審問に関する記録は、実際に審問が行なわれなかった情報だけの案件も含めると、23件が確認されている。本稿で分析するのは、偶像崇拜に関連している事例だけである(表1)。たんなる迷信、あるいは一夫多妻や愛人関係(concubinato)などのキリスト教の婚姻・性関係の規範から逸脱している行為で摘発された事例などは、本稿においては分析の対象としていない。

表1 1536—1540年に偶像崇拜で告発されたインディオ

		被告発者	階層	告発者	判決	通訳
36	トラナコパン	Antonio Tatatecle	貴族	E、C	M3,D	D,AR C
		Alonso Tenixtecle	貴族		M1,D	
	テスココ	Martín Ocelotl	商人	カシケ	B,D	P,T
37	テスココ	Andrés Mixcóatl	神官	カシケ	B,M	AM
		Cristóbal Papalotl	神官			
		Antón				
38	アスカボ ツアルコ	Pablo Tlacatecatl	貴族	A	B	M
		M.Tlacochealcate	貴族			
		F. Huitznahual	貴族			
		Martín Cuico, Pedro Cuatle y Juan	監視人			
	<u>トラパナロヤ</u>	Diego Tlacatecatl	カシケ			
	<u>トルテペック</u>	Juan	カシケ			
39	トラテロルコ	M.Atlahuacatl H.	貴族		M,D	
		F.Chocarrero	貴族		M,D	L
	テスココ	Carlos Ometochtzin	カシケ	先住民	絞首刑	S,AM,R
	メヒコ	Miguel Puchtecatl Tlailotla	貴族	先住民	M	S,AM, AS,J,P
	<u>コルウァカン</u>	Baltazar	カシケ			AM,Z, J
		Andrés	貴族			
	オクイトウコ	Cristóbal	貴族	助任司祭	T3年	J,AM
		Catalina	貴族			
		Martín	貴族		T2年	
	イスカール	Alonso Tlilanqui	神官	助任司祭	釈放	AM
マトラトラン	Juan	カシケ	使用人		O	
40	<u>オクイラ</u>	Zolín	大工	A、P		
		Miguel Tezcacoacatl				
	トロラルパ	Antonio Nauyotl			B,D5年	
		Pedro	カシケ		B,D10年	
	<u>イグアラ</u>	Juan	カシケ			

下線は通報のみで審判なし。

告発者：A—アルグアシル、C—コレヒドール、E—エンコメンデロ、P—ピリウアリ

判決：異端誓絶と鞭打は共通、B—財産没収、M—修道院禁固、D—所払い、T—鉱山労働

通訳者：C：クリストバル・オリン、D：ディエゴ・ディアス、J：フアン・ゴンサレス

L：ルイス・デ・レオン、M：アロンソ・デ・モリナ、O：アンドレス・デ・オルモス

P：ペドロ・デ・モリナ、R：アントニオ・デ・シウダー・ロドリゴ

T：トマス・デ・レグレス、S：ベルナルディーノ・デ・サアゲン

Z：アルバロ・デ・サモラ、AM：アロンソ・デ・マテオス

AR：アグスティン・デ・ロダス、AS：アロンソ・デ・サンティアゴ

司教スマラガ師による異端審問以降、偶像崇拜を名目とした先住民への異端審問はメキシコ中央部では行なわれなくなった。その契機のひとつとして指摘されているのは、先に述べた1539年のテスココの領主カルロス・オメトチツイ

ンに対する異端審問である。彼の公開処刑の1年後、先住民の異端審問の方針の転換を示唆する内容の本国異端審問長官からの書簡が司教スマラガ師の元に届く。その書簡では、改宗まもない先住民に告解や苦行という教育的措置を施さないまま、苛酷な刑を科するのは適切な方法でないという見解が述べられていた。同時に、強制労働、財産没収、絞首刑と火葬という厳しい措置がとられていたため、先住民たちが異端審問の本来の目的を誤解する危険性があることを指摘している³⁾。

つまり先住民を略奪・搾取するために植民者は異端審問を実施しているという疑念を抱く可能性があるというものである。事実、異端審問のなかには、地域住民から貢納を受取る権利を有するスペイン人のエンコメンデロやコレヒドール、聖職者たちが、徴税権や労働力利用権をもつ有力カシケを告発している事例がある。また、利害が対立する別の有力先住民貴族による告発も存在する⁴⁾。

偶像崇拜の廉で先住民を異端審問にかけることが少なくなったのは、司教スマラガ師による異端審問の時代の行き過ぎの反省があったと思われる。つまり先住民を「一人前のキリスト教徒」とみなしてヨーロッパ人と同じように異端審問することに対する疑念が、先住民のキリスト教化を推進する当局側に生じたためことがその一因でもあったと推測できよう。

2. 異端審問の証言の多元性

コルテスが率いる侵略者によるテノチティトラン制圧から約20年間、メキシコ中央部の先住民社会のキリスト教化はさまざまなかたちで展開された。「異教徒による邪悪な宗教儀礼」が行なわれていた先住民の神殿や神々の像は、偶像と見なされ破壊された。宗教施設を物理的に破壊する行為のかたわら、異教徒の先住民をキリスト教徒に改宗する作業も宗教関係者によって行なわれた。初期の修道士は村々に赴き、膨大な数の先住民に洗礼を施し、成人夫婦に対するキリスト教式の結婚式も執行した。さらに、洗礼という表面的なキリスト教化だけではなく、精神面での深いキリスト教化も試みられた。若い世代に属す

る一部の先住民貴族の子弟のなかには、修道院や学院などで修道士の手によって「身も心もキリスト教徒」として育て上げられる者もいた。「異教時代の悪習」と無縁なかたちで育てられた先住民の若者は、キリスト教的な生活様式に基づき生活することに、両親たちのように違和感をもつこともなかった。

しかし、洗礼を受けただけで表面的にキリスト教徒になった先住民の大半は、キリスト教徒として生きるにはきわめて曖昧で不安定な状況におかれていた。それは16世紀末にドゥランが「ネパントリ(nepantli)=どっちつかずの状態」と表現したものである(Durán 1967,I:237)。次に紹介する先住民オトミーの集落トラナコパン(Tlanacopan)のトラカテクトリ(*Tacatecle/Tlacatecuhtli*)の証言をはじめ、異端審問の証言からは、先住民がおかれていたさまざまなネパントリの様子を知ることができる⁵⁾。

トラナコパンの有力者トラカテクトリは、1535年に洗礼を受け、二週間に一度、キリスト教の教義を聞くため、トゥーラの教会に赴いていた。神父たちの説論に接し、自分がいろいろな罪を犯し、神を冒瀆する行為をしてきたことを悟ったという。そのため、彼が保有していた偶像の多くを焼却処分したが、いくつかの偶像は洞窟に隠匿しておいた。その理由は、スペイン人に納める貢納を確保するため、特定の偶像が必要だったからである。つまり、偶像を利用して儀式を執行し、集まった供物の一部を貢納品としてスペイン人に納めていたのである。洗礼を受けた1532年以降、悪魔へ供物はやめていた。1536年、雨が降らず、雨乞いの儀礼の必要性が生じたので、ついに悪魔に生贄を捧げる儀式を執行せざるをえなかった。

改宗先住民のトラカテクトリは、日曜日毎に開催される教会でのミサに出席するというキリスト教徒としての規範を守っていた。その一方、必要となれば、先祖がやっていた独自の儀式を執行していた。このような事例は、異端審問の記録に数多く登場している。それゆえ、1530年代後半の先住民を対象とした異端審問記録は、当時のメキシコ中央部の多くの先住民がおかれていたネパントリスモの状況を知るうえできわめて有用な情報を提供してくれる。

先住民に対する異端審問の記録を分析する上で留意すべき点は、証言者の語りにみられる画一性と相矛盾する多元性の問題であろう。この種の裁判記録にはよく見られる証言の画一性は、証言作成者による様式化された供述書の作成という側面と、スペイン語を自由に操れない先住民側の発言の通訳者による意図改変という側面に起因する。証言者の多くは、尋問官が行なった質問に「そのとおりです」と鸚鵡返しに返答しているだけである。

スペイン語を操れる先住民が皆無に近い状況では、各種の言語の通訳者の介在は不可欠だった。分析対象とした案件において、ナウア語、オトミー語、マトラツインコ語、トトナカ語の通訳者がいた。その中には、「ナウアトル語＝カスティリヤ語辞典」編者のアロンソ・デ・モリナ、あるいはアンドレス・デ・オルモスやベルナルディーノ・デ・サアゲンなど先住民社会に関する詳細な民族誌を残した修道士もいる。異文化に通暁した卓越した通訳者でも、通訳過程で、改変や歪曲、無視や省略などが介入しなかったとは言えないだろう。

さらに、何か悪魔的なもの(diabólico)が先住民の言動に潜んでいるのではないかという姿勢で、大半のスペイン人は先住民に対応していた。それゆえ、ともすれば先住民の証言者が発言していないことを記録し、極端な場合は実際には起きてもないことをでっち上げることもあった(Cervantes 1994)。次章で分析するように、鉱山での強制労働という判決から1年経って、押収された偶像の一部は、告発関係者の指示で新たに作成され、偶像崇拜の証拠物件として「植え付けられた」という証言が提出されている事例もある。

こうして「作成された証言」を前にして、実際にどのような行為や発言があったかを確定することは難しい。黒澤映画の「羅生門」的状況、いわゆる「藪の中」の状況に直面せざるをえない。利害や立場の異なる人物の証言に基づいて再構成された事件の過程が、実際に起きたこととどこまで一致しているかを判断する手立てはない。だが、相互に矛盾している証言、捏造された証言からも、当時の輻輳した社会関係に関する貴重な情報を読み取ることは可能である。

II. 捏造された偶像－オクイトゥコの事例⁶⁾

1539年8月19日、メキシコ市にある異端審問当局は、ポポカテペトル火山の南西山麓にあるオクイトゥコ村⁷⁾の有力者ドン・クリストバルを告発する内容の報告を受理した。証言を行なったのは三人のインディオと一人のスペイン人である。三人のインディオは、フランシスコ・コアトル(25歳前後)と妻イサベル、ならびにトマス・コアトル(20歳前後)で、フランシスコとトマスの二人は10年以上もクリストバルの使用人(esclavo)を勤めていた。スペイン人の証言者は、オクイトゥコの北にあるシマルテペック在住のエンコミエンダ管理人(calpixque)のルイス・アルバレス(23歳)であった。

しかし、実際にクリストバルを偶像崇拜の嫌疑で告発したのは、オクイトゥコ在住の助任司祭(clérigo vicario/cura)ディエゴ・ディアス⁸⁾である。彼は4月の段階でクリストバルの行状に関する調書を作成していた。証言者となったのは、告発されたクリストバルの息子ガブリエル、前述のスペイン人ルイス・アルバレス、ならびに司教スマラガ師のエンコミエンダに指定されていたオクイトゥコの管理人のアロンソ・デ・リニャンの3名だった。4月13日に作成されたという彼らの証言は、クリストバルが偶像崇拜の廉で拘束された背景について詳しい情報を提供してくれる。

1. 復活祭直後の日曜日深夜のミトーテ

復活祭の後の最初の日曜日(cuasimodo)の夜、オクイトゥコに滞在していたルイス・アルバレスはアロンソ・デ・リニャンと話し合っていた。その時、クリストバルの家の方向で大きな騒音がしていることに気づいた。二人で彼の家を訪ねると、インディオたち⁹⁾が酩酊し大声で歌っている声が響いてきた。隣接する彼の兄マルティン・ティソック(Tizoc)の家からも大きな歌声がしていた。アロンソ・デ・リニャンを現場に残すと、アルバレスは村に駐在している助任司祭ディアスに通報した。彼はすでに床に就いていたが、アルバレスと数

名の先住民を伴って、クルストバルの家に急行した。

クルストバルの家では、インディオたちがミトーテ¹⁰⁾を繰り広げていた。クルストバルは崩れ落ちないように二人のインディオに両脇を支えられ、「悪魔の歌(cantares del diablo)」を大声で歌いながら踊っていた。助任司祭ディアスは、「イエス・キリストの血(=葡萄酒)を飲んだ(=洗礼した)」有力者が、ミトーテは罪ではないなどと言って、悪い見本を平民(*macegual/macehual*)に示すことはよくないと叱責した。そして、大声など立てず静かに眠りにつくように、その場にいた多くのインディオにも説諭した。

スペイン人たちはいったん家に帰ったが、夜10時頃、通りの方から大声で歌うのが聞こえてきた。首に花輪(*sarta/guirnalda de rosas*)をつけ、花束(*rosas/suchiles*)を両手にしたクルストバルを中央にして、あかあかと燃えるサカーテ(*zacate*)の束を手にしたインディオたちが、大声で歌いながら通りを行進していた。助任司祭は直ちに止めるように説得したが、彼らは歌ったり泣いたりしながら、踊り続けた。助任司祭は、クルストバルやマルティン、彼らの配下の者たち¹¹⁾を拘束するように指示した。先頭にたつて司祭の命令を実行したのは、クルストバルの息子ガブリエルであった。

息子ガブリエルの証言によると、こうした悪行はしばしば行なわれていたという。彼自身は教会にいたのですべてを目撃したわけではないが、父親クルストバルや叔父マルティンなどの有力者はしばしばミトーテを行ない、平民たちにも参加するように強制していたという。さらに父親クルストバルは、アベマリア、信徒信条(*credo*)、我らが父(*Pater noster*)などの祈りの言葉を知らず、昔の神々である太陽や月に呼びかける言葉を発していたとも証言している。

2. 摘発された偶像と儀礼用品

8月19日、異端審問当局の担当官フアン・ゴンサレスがオクイトウコで行なった事情聴取では、4月の証言にない証言も加わり、クルストバルの偶像崇拜や越権行為に関連する情報も寄せられている。なかでいちばん注目を引くのは、

クリストバルの家の搜索によって、隠匿されていた二体の偶像が発見されたことである。その家宅搜索があったのは、事情聴取が行なわれた前の週の土曜日(おそらく8月16日)のことである。

クリストバルは自分の家に神殿(cue)から取り出した偶像をペターテ(ゴザ)に包んで隠匿しているという情報が寄せられていた。土曜日の午後、妻カタリーナが悪魔にコパールを与える儀礼をしているという通報があった。そこで、助任司祭ディアスたちは偶像搜索の名目で彼の家を訪問すると、家には妻のカタリーナやインディオ女性たちがいた。ディアスらが到着した際、一人のインディオ女性が壺に何かを入れ持ち出そうとしていた。彼女はトウモロコシを運んでいると答えたが、ディアスとアルバレスは彼女を拘束した。女性たちは大声を上げて抗議したが、そこから小さな神像(diocesillos)が見つかった。隣の部屋のベッドにペターテがあったが、妻は事前に何かを抜き取り暗がり隠したという。助任司祭ディアスの命令で、彼女は隠していたものを持ってきた。

家宅搜索で発見されたのものは、二つの木製の小さな偶像(idolito)と二つの小石の連なった数珠(cuentas)だった。クリストバルの使用人たちは、木製の偶像のひとつは、トラロカテクトリ(*Tlalocatecutly*/*Tlalocatecuhtli*)、つまりトラロック、もう一つはチコメコアトル(*Chicomecóatl*)であると証言した。また小さな石の数珠のようなものは、「悪魔の心(*corazones de cierta demonios*)」、「食料の心(*corazones de la comida*)」だと証言している。

クリストバルの使用人たちは、クリストバルたちがさまざまな伝統的儀礼を継続していたことを報告している。使用人のフランシスコ・コアトルと妻イサベルの証言では、日曜日の深夜、クリストバルは兄ティソックの指示に従って星空を崇め、その後、焚火にコパールを投じ、証言者の理解できない言葉でお祈りしていたという。また、20日毎に行なっていた異教徒時代の儀礼においては、火のそばで鶏の首がはねられ、血が火に注がれていた¹²⁾。その後、鶏を調理し、タマーレスなどの食事が作られた。色彩のついた葦、花、カカオなども添えられた食事は3日間放置され、4日目に参加者が共食していた。その後、

参加者には、男用のマントや下帯(maxtli)、女用の上着やスカート(enaguas)といった衣服類が分与されたという。衣服は儀礼を行なう偶像の性に対応し、ヤオヨトル(*Yaoitl/Yaoyotl*=戦争)、テスカトリポカ、トラロカテクトリ、クスアンケ(*Cuzuanque*)といった男性神の場合にはマントと下帯、そしてシウアコアトル(*Cihuacóatl*)、チコメコアトル、イチプチトリ(*Ychpuchtli*=若い女性)といった女性神の場合には上着とスカートが、ペターテと椅子でしつらえた玉座に置かれていた¹³⁾。

当局によって、クリストバル夫婦の資産は接收された。資産は彼らの自宅だけでなく、使用人セバスティアン、アンドレス、トナル(Tonal)などの家にも保管されていた。接收された資産はいっさい売却などしないという条件で、助任司祭ディエゴ・ディアスによって管理されることになった。押収品リストの大半は装飾品と衣類である。マントを除く衣類の大半は個人的に利用したもので、わずかだがヨーロッパ様式のものもある。一方、装飾品には金が鑲められているものが目立っている。また、背中につける幟飾り(*penacho*)、羽毛付き兜、白や緑色の翼(*alas*)、矢を入れる籠(*aljaba*)、頭飾り用の山羊や豚の頭蓋などはクリストバルが伝統的なミトーテをしていたことを推察させるものである。

表2 押収されたクリストバルの資産

装飾品	<p><自宅> 羽毛つき金容器 2、羽毛付き兜 4、白色翼 2、緑色翼 2、羽毛飾 2、籠 2 フェルト製籠、小羽毛飾り 9、首飾り 3、背中幟飾り 4、山羊や豚の頭蓋 16、 アーチ型頭飾、うちわ(白 2、黄 3)</p> <p><セバスティアン> 緑石 13 付き黒ロサリオ、金製十字架、聖母像付き金宝石、 赤青石指輪、金製首飾 4、金糸緑石帽子 2、金盤 3、金製偶像、金製耳飾 4 金製唇飾、豆粒金、馬蹄形金、金延棒、金製膝あて、骨と金珠 3 の数珠 緑石 3 個つき紐、ガラス緑石首飾 3、木製数珠飾 2、銀製耳飾 2、唇飾 7、2 トミン</p> <p><アンドレス> 金縁緑色羽毛飾 10</p>
衣類	<p><自宅> 貢納マント(10 枚)2 包み、彩色マント 3、マゲイ製マント 2、下帯、下帯飾 古下帯、汚れシャツ 2、黒縞シャツ、黒ハンカチ、古ハンカチ 2、彩色スカート 2、 スカート 2、</p> <p><アンドレス> クエルナバカ製マント 4、白大マント、彩色大マント、シーツ縦布 6 マント用縦布</p> <p><トナル> マント 5、縦布 3</p>
他	<p><自宅> カカオ 300、白木綿 3 袋、羊毛、ヒカラ 24</p> <p><アンドレス> ヒカラ 28、黒縞大形覆い、現地製シーツ</p> <p><トナル> 現地製シーツ 8</p>

また、押収品に、「貢納用のマント10枚を入れた包み(fardo)」と記されたマントがある。この記述は、1章2節で紹介した先住民オトミーの集落トラナコパンの有力者トラカテクトリと同じように、オクィトゥコの有力者クリストバルも各種の儀礼を執行することで、エンコメンデロである司教スマラガ師に貢納すべき物品を住民から徴収していたことを窺わせる。実際、証言者の一人フランシスコは、クリストバルは平民から多くの物品を奪い、エンコメンデロである司教に収める貢納品のマントを2・3荷と着用し、着用した物品で羽毛細工の装飾品などを作っていたと告発している。これ以外にも、2トミン(tomín)という1537年に発行されたばかりの銀貨があることも、クリストバルが植民地支配体制とのあいだに取り結んでいた関係の度合いをうかがわせる。

3. 異教的儀礼の実行者たち

8月20日、クリストバル、妻カタリーナ、クリストバルの使用人(esclava)カタリーナとマルタ、ならびに前日に証言した使用人トマス・コアトルの妻マリアに対する事情聴取が行なわれた。クリストバルに対しては、10年前に洗礼を受けた後、鶏を生贄とするなどの異教的な儀礼、夜中の大量飲酒による酩酊、偶像の隠匿などを行なったかについて質問された。しかし、彼はいずれの容疑も否定している。また、「我らが父」、アベマリアなどのキリスト教の祈りの言葉も知っている、息子ガブリエルの証言を否定している。妻が隠そうとしたとされる偶像に関しては、クリストバルはまったく見覚えがないと主張したが、二つはトラロックとチコメコアトルの神像だと指摘している¹⁴⁾。

その一方で、クリストバルは、キリスト教の神父が独占すべき権限である先住民の結婚の儀式を執行し、謝礼として鶏などを受取っていたことは認めている。そして、近隣にあるトラカテペック、テモアク、シュミルテペック、テテラ¹⁵⁾の有力者たちも、同じ行為を行っていると証言した。そうした結婚仲介人(casamentero)をしている村内の6名の名前を挙げている。また、オクィトゥコ村で偶像を隠匿しながら呪術師(brujo/hechicero)として活動している人物が

表3 オクイトゥコ村の呪術師と保有する偶像

地区	呪術師	特徴と保有する偶像
クリストバル区	Ezacicimitl	地域の偉大な妖術師、服やほかの品物を持ち歩く。コパールを食べ、人血を飲む
	Xayacamachan	コパールを食べ、人血を飲む
	Metzocmecatl	XiutecatI
	Martín Tizoc	暦を計算する
	A.TecuaneuatI	暦を計算する
トラカテカトル区	TeucatI	Tonacacingo 出身、coamiauatl を祀る、ほら貝を所有
	Tetlatla	macuyxuchitI、ほら貝を所有
	Cuetlan	カシケの Juan の家居住、ycnopilli を所有
ミゲル区	TecpatetI	父親とともに行動、異教時代の偶像保有
	Aculnauacatl	暦の計算
コアマンゴ	Una vieja	XulutecatI の娘

太字は妻カタリーナの証言

挙げられている(表3参照)。そのなかにはエカツイツィミトル(*Ezacicimitl* /*Ecatzitzimitl*)のように、「コパールを食べ、人間の血を飲み」、地域住民からは偉大な妖術師と評価されていたものがある。彼の場合、1536年に告発されスペイン本国送還の刑に処されたテスココのマルティン・オセロトルのように、服や物品を持ち歩きながら手広く商業活動を行っていたという。

こうしたことから、カトリック神父たちが地域の先住民の要望に十分に対応できない場合、先住民たちは従来の伝統的な儀礼を自前で執行していたことが推測できる。クリストバルは補足意見表明において、洗礼以降、息子が病気になった1年ほど前、息子が回復するように悪魔に鶏の血とコパールを二度ほど捧げたことを含め、三・四回、悪魔にコパールを捧げたことがあると述べている。また、クリストバルの妻カタリーナも、夫が収監された後、彼が赦免されることを願って、二度ほどコパールを火に投じたことがあると告白している。

ささやかな祈願のため儀礼だけでなく、先スペイン期の伝統的な祭事暦に従って挙行された儀礼もあった。妻カタリーナは、洗礼後も夫婦二人で、「太陽と悪魔の祭りの計算係(contador del sol y de las fiestas de los demonios)」だった兄マルティン・ティソックの指示に従って、異教徒時代のように悪魔にコパールを捧げる儀礼を行っていたと告白している。

4. 処罰の言い渡しと偽証の発覚

クリストバル、妻カタリーナ、兄マルティンはメキシコ市に移送され、1539年9月初旬からメキシコ市の異端審問当局による審問を受けることになった。10月10日、メキシコ市の異端審問当局は一連の処罰と強制労働という判決を言い渡した。見せしめとしての処罰は、指定された祝祭日に、司教区牢獄から大聖堂まで頭巾をとり、裸足で行進し、終日立ったまま説教を聴き、その翌日は街角で罪状の公表と鞭打ち100回を受け、二度と偶像崇拜をしないと誓うことであった。クリストバルとマルティンの両名には、それぞれ3年間と2年間、鉄製の足枷をつけて鉱山で労働を行なうことが言い渡された。3人に対する公開の処罰は、メキシコ市で10月12日と13日に執行された。また、11月6日、鉱山労働を言い渡された二人を働かせる権利の入札が公示された。権利を落札した商人ディエゴ・ゴンサレスは、一人当たり1年間12ペソ(pesos de oro de mina)、合計60ペソを異端審問当局に納入し、二人を引き取った¹⁶⁾。

1540年3月16日、鉱山で労働しているはずのクリストバルが異端審問当局に召喚された。彼はオクイトウコから所払いされ、3年間の鉱山労働に赴いたが、2ヵ月後にはオクイトウコに戻っていた。村に戻った理由は、妻に会い、いくばくかの食料を手に入れるためだったという。3年間の鉱山労働を勤め上げないなら、全資産を没収すると言い渡した。また、鉱山には自由の身である平民を連れて行かないよう言い渡されている。このことは、最初の鉱山労働の際に彼の身の回りの世話をするインディオがいたことを示唆している。

それから20日ほどたった1540年4月5日、クリストバルの拘束に繋がる重要な証言をしていたアロンソ・デ・リナンとルイス・アルバレスの両名が、メキシコ市の異端審問当局に出頭した。両者は「自分の良心の呵責」と「神への奉仕」の気持ちから、1年前の証言には偽りがあったことを告白した。そして、彼らが実際に目撃したことや助任司祭ディアスの行状について証言した。

彼らの証言によると、1539年8月中旬の土曜日、クリストバルの家で発見された二体の偶像は助任司祭ディアスの指示で造られたものだという。ディアス

は、近日中にオクイトウコを視察予定の司教スマラガ師の面前で、「行状の悪いクリストバル」が不穏な発言をしかねないかと気になっていた。偶像崇拜の嫌でクリストバルを予防拘束するため、木で偶像を造り、それを密かにクリストバルの家におくという陰謀に協力するよう二人に要請したのである。

彩色した紙を頭部につけ、体全体を彩色した木製の偶像だけでなく、直前まで儀礼を行っていたように見せかけるため、偶像に供えられる品々も取り揃えることにした。市場でさまざまな材料を購入し、生け費用の鶉、二つの花飾、ウアウトリの種実(semillas de bledos)で作ったパン、煙草(picietl)など異教徒時代にインディオたちが行っていた儀礼で使っていた物¹⁷⁾が用意された。さらに、教会で助任司祭ディアスがミサに参列した先住民たちに説教している時間にあわせ、スペイン人がほら貝を吹くという小細工までした。ほら貝の音がしたら、「今、ほら貝の音がしていたのに気づいたか。生贄が行なわれている。クリストバルの家がちがいない。皆で確かめに行こう」とディアスがミサ参列者に呼びかけ、彼らをクリストバルの異教的儀式執行の状況証拠の証人に仕立てることにした。この事前の陰謀すべてがそのまま実行されたわけではない。

反抗的で従順でない先住民を拘束するため、証拠を捏造することに対し、助任司祭ディアスはほとんど抵抗感を持っていなかったようである。同じように捏造証拠を「植付け」ようとしていたことは、ルイス・アルバレスによって報告されている。彼がシミルテペックの一部の先住民に腹を立てているのを知って、ディアスは彼らの家に「生け費用の石刀」やコパールを置いておけば、偶像崇拜の嫌疑で拘束し、異端審問にかけられると助言した。実際、どこからか調達した石刀をアルバレスに送ってきたが、彼はディアスの助言を実行しなかった。それ以外にも、ニヤニヤ笑いながら説教していたこと、インディオ女性に性的関係を強要するなど、悪徳司祭であったことが証言されている。

1540年4月、二人のスペイン人による告発によって、ディエゴ・ディアスは異端審問当局に拘束され、メキシコ市の司教区座の監獄に収監された。この案件による裁定がどのようなになったかについては資料がない。しかし、1542年2

月にはオクイトウコの別の有力者ドン・フアンの息子フランシスコを殺害した容疑で告発されている。助任司祭ディアスは、1541年のクリスマスの時、意見の対立したフランシスコを「クエルナバカへの道路封鎖などを企てた」という反乱罪で拘束し、自宅地下牢に幽閉した。住民たちにはフランシスコは脱獄したと説明していたが、実際には鼻を切り落とすなどの拷問の末、殺していた。1542年の殺人容疑による告発の結果、ディアスは終身刑を宣告されている¹⁸⁾。

悪徳司祭ディアスによる証拠捏造があったとしても、1539年4月にクリストバルが何らかの祝祭をしていたことは確かである。4月の後半は、先スペイン期の暦ではウェイ・トソストリ(Huey Tozoztli、4月14日～5月3日)に該当する。この月の祭神は、トウモロコシの女神シンテオトル(Cinteotl)とチコメコアトルとされ、後半にはトラロック(Tlaloque)に対する子供の犠牲も行なわれていた¹⁹⁾。メキシコ中央部の先住民社会では、作付けに必要な雨乞いの儀式が4月後半に行なわれていた。月の祭礼では、チコメコアトルとトラロックの神像が不可欠であった。いくつかの地域で助任司祭を体験していたディエゴ・ディアスは、先住民社会における農耕儀礼の実態を何らかのかたちで知っていた可能性がある。でなければ、クリストバルがトラロックとチコメコアトルと認定しうる偶像を作成できなかつただろう。

Ⅲ 大神殿の神々の行方

先住民の異教的行為の証拠である偶像の探索、偶像崇拝行為を実行している先住民の摘発は、各地区に派遣されている宗教関係者によって個別的に展開されていた。同時に、メキシコ司教区など植民地政府当局が先頭にたって偶像摘発キャンペーンを直接展開することもあった。その代表例が、1539年のテスココのカルロス・オメトチツインの摘発である。そうしたなか注目に値するのが、1539年8月から1540年1月にかけて、テノチティラン大神殿に祭られていたメシーカの主たる神々、偶像の探索・摘発のキャンペーンである。

1. 姿を消したウィチロポチトリ²⁰⁾

1539年6月、メキシコ市サンフアン地区に居住する画家と称する先住民マテオとペドロの兄弟が異端審問当局に偶像崇拜に関する重要な情報を持ち寄った。彼らが証言しようとしたきっかけは、1年前にトルーカにやってきた司教スマラガが行なった説教であるという。司教スマラガの説教は、何か偶像について知っている者は、彼のもとに来て告白するようにというものだった。

兄弟の証言によると、スペイン人がテノチティトランを占領した際、アステカの主神ウィチロポチトリなどいくつかの神像が持ち出され、ミゲルという人物の家に運ばれたという。マテオとペドロ兄弟はモクテスマの信頼が厚かったというトラトラトル(*Atolatl/Tlatolatl*)の息子で、父親が包みで覆われた偶像を崇拜しているのを見たことがあった。偶像を包み(*envuelto*)から出したものは死ぬというので、有力者といえども偶像を見たことはなかったという。

1521年8月、テノチティトランが陥落した時、偶像が入ったいくつかの包みは、兄弟の父親トラトラトルの手によって、アスカポツァルコの領主オクスツィン(*Ocuicin/Oquiztzin*)に渡され、しばらく彼の家で崇められていたという。オクスツィンと有力者トリランカルキ(*Tlilanci/Tlillancalqui*)は、四体の偶像を管理するよう父親に指示していた。四つの偶像は、シウァコアトル、テルプチトリ(*Tespuchitl/Telpuchitl*)、トラトラウキ・テスカトリポカ(*Tlatlauque Tezcatepoca/Tlatlahqui Tezcatolipoca*)、そしてテペウァ(*Tepehua*)だった²¹⁾。

この計五体の偶像は、それから1年近く、アスカポツァルコ領主の自宅で秘密裡に崇拝されていた。1524年、エルナン・コルテスがグアテマラ方面へ遠征した際、アスカポツァルコ領主や父親トラトラトルも遠征に同行することになった。しかし、彼らは遠征の途中の「戦争」で死んでしまった²²⁾。カシケの不在中に偶像を管理していた長老のナウエカ(*Nahueca*)が、マテオとペドロ兄弟を訪問し、上の領主たちから指示があるまで、自分たちが偶像を管理しなければならないと連絡してきた。

メキシコ市のインディオ領主がトラクエシュカトル・ナナウァツィン

(*Tlacuxcalcatl Nanavanci*)であった時²³⁾、メキシコ市のインディオ領主とトゥーラの領主イシュクエクツィン(*Yxcuecueci/Ixcuecuetzin*)によって派遣された称する使者二人が兄弟のもとにやってきた。五つの偶像は、五人の担荷夫によって、メキシコ市内のミゲル・ポチテカトル・トライロトラック(*Puxtecatl Tlaylotla/Pochtecatl Tlailotlac*)の家まで移送された。ペターテに包まれた偶像はポチテカトルの家に安置されていた。しかし、数日後には別の場所に運ばれ、若い兄弟たちは行方については何も知らされなかった。

異端審問当局はミゲル・ポチテカトルを拘束し、行方不明になったウィチロポチトリなどの偶像の行方について尋問した。7月18日の尋問では、二人の使者が彼の家で五つの包みとともに一夜を過ごしたが、包みに偶像があることは知らなかったという。その包みは10日間ほど彼の家にあり、メキシコ市のインディオ領主ナナウァツィンがコパールやお香を捧げに来ていたという。しかし、その後の偶像の行方については、ポチテカトルも知らないと言明した。

8月5日、ポチテカトルに対する告発が受理されたが、弁護に立ったビセンシオ・リベロルは異端審問の過程での通訳の不備などを指摘した。その結果、ベルナルデーノ・サアゲンなどが参加し、文書作成が行なわれたようである。そして、9月23日、ポチテカトルのキリスト教徒としての行動、彼が関与したとされる偶像の行方についての情報提供を求める通達が出された。

2. 偶像の行方に関する長老たちの証言

偶像の行方についての手掛かりは、10月14日に異端審問当局に出頭したチコナウトラの住民フランシスコらによってもたらされた。彼はメキシコ市内に居住している預言者7名の名前を挙げ、かつて異教的な儀礼を司ってきた彼らなら何らかの情報を持っているはずだと証言した。同じ村の警吏(*alguacil*)のファン・ミゲルとトラテロルコの警吏マルティンも彼の証言を裏付けた。この異端審問当局に出頭してきたフランシスコは、1539年6月にテスココの領主ドン・カルロスに偶像崇拜の嫌疑でメキシコ市の異端審問当局に告発したフラン

シスコ・マルドナード²⁴⁾と同一人物と見なしてよいだろう。10月24日、預言者たちへの尋問が行なわれた。証言したのは、サンタ・マリア・クエポパン(Cuepopan)区のコルウァ・トラピシュケ(*Culoa Tlapisque/Colhuatlapixque*=コルウァの守護者)とアチャカトル(*Achacatl*)の二人だった。

コルウァの証言によると、ポチテカトルの家に置かれていた偶像の行方は、次のようなものであった。当時、エカテペック領主だったドン・ディエゴ²⁵⁾や有力者たちの命令を受けて、偶像を護る仕事を代々続けていた預言者たちが偶像をトゥーラまで移送したという。偶像の管理者だったクユチトル(*Cuyuchtli*)、カウァカチトル(*Cauacachtli*)はすでに亡くなっていたが、それぞれメキシコ市の有力者アナウァカトリ(*Anahuacatl*)とトゥーラ領主イシュクエクツィンに仕えていた。もう一人の管理者は現在も存命のクイチャラチタウァ(*Cuychlachitaua*)で、今はネシュパネカチトル(*Nexpanecachtli*)と名乗り、トゥーラの前領主やドン・ペドロ・チャカウエパンツィンに仕え、トラトラウケ(*Tlatlauque*)の偶像を管理していたとされる。

8年から10年前(1530年頃)、ウィチロポチトリの神像を委託していた有力者が拘束されたことがあり²⁶⁾、エカテペック領主だったドン・ディエゴは神像を宣教師たちに提出すべきかについて、4人の有力者と協議したことがあるという。しかし、有力者アチャカトルは強硬に反対し、偶像を当局に提出しないことになったという。さらに7年前(1532年)、当のアチャカトルが、「私の神をこの目を見た。今は〔メキシコ市テオパン(Teopan)地区の〕テマスカルティラン(Temascaltitlan)の若者の家(Telpuchcalco)に安置されており、そこで神をお護りしている」と話していたと、コルウァは証言している。

コルウァの証言によると、安置されていたウィチロポチトリには、ヒスイが嵌められた豪華な4枚のマントが掛けられていた。ウィチロポチトリとテスカトリポカを表わす意匠が描かれていたマントが2枚ずつあったという。マントを保管していたのは故人のコアウトラヤウトル(*Coautlayautli*)とトメカオ(*Tomecao*)だったが、妻たちは健在で偶像のことを知っているかもしれないと

言った。一方、こうしたコルウァの証言について、1538年に洗礼したばかりの有力者ペドロ・アチャカトル(55歳前後)は、何も知らないと答えている。

引き続きて召喚されたのは、マルティンというインディオ商人の妻だった。ポチテカトルの家の隣りに住んでいた商人クィシュ(*Cuix*)は、家の敷地にチャナンクィウァトル・マリンツィン(*Chananquiavtl Malinci/Malintzin*)という名の偶像を埋めていた。7・8年前(1532年頃)、クィシュが亡くなった際、イシュコア(*Yxcoa*)とヤウトル・シャコパンカルキ(*Yautl Xacopancalque*)の二人が偶像を掘り出し、どこかに持ち去ったという。偶像の大きさは1バラ程度で、包みで覆われていたので中味を見ていないという。この証言に登場する偶像は、異端審問当局が躍起に行方を捜していたウィチロポチトリなどのメシーカの主神とは違い、商人たちが崇拝していた神像と思われる²⁷⁾。

3. コルウァカン領主たちの情報

1539年11月30日、異端審問当局の裁定により、テスココの領主ドン・カルロスは偶像崇拝などによって公開処刑された。彼の場合も、直接の証拠となるものではないが、自宅の壁や十字架の下に埋め込まれた偶像、山中の雨乞い儀礼で使われていた偶像などが偶像崇拝の証拠として摘発されている。隠匿された偶像摘発キャンペーンはかなり執拗なものであったと思われる。

ドン・カルロス公開処刑の2日後、12月2日、異教時代の神々の名前と偶像の隠匿場所についての情報を提供するため、コルウァカンのカシケのバルタサールと有力者アンドレスがメキシコ市の異端審問当局に出頭してきた。バルタサールは、1524年に他の先住民有力者とともに洗礼を受け、1536年の復活祭にキリスト復活に関するナウァトル語の歌²⁸⁾を作ったとされている(León-Portilla 1974)。植民地当局からすれば、バルタサールはきわめて模範的なキリスト教改宗者であった。

テノチティラン大神殿にあったとされる偶像に関して、バルタサールは神像を飾る羽毛製装飾品などを管理していたコルウァとアマンテカ(*Cimanteca/*

Amanteca=羽毛細工職人)が偶像を管理しているはずだと答えている。このコルウァは前節のコルウァ・トラピシュケと同一人物である。テノチティトラン陥落前後の様子についてバルタサールやアンドレスが述べていることは、彼らの目撃談ではなく、長老コルウァから聞いたエピソードと考えてよい。

テノチトランが陥落した時、モテクスマの指示によってメシーカの主要な偶像が移送されたことを証言している。バルタサールの証言によると、ウィチロポチトリなどの偶像は、故テウアチチラヨ(Teuachichilayo)によって持ち出され、テラシン(Telacin)という洞窟に6日ほど隠され、そこからメキシコ盆地北部のシャルトカンに移送された。その後、偶像はいったん北西部のシロテペック(Xilotepec)を経て、テノチティトランの東のテスココ湖の島テペツィンコ(Tepecingo/Tepetzinco)の洞窟に隠されたと聞いていると述べている²⁹⁾。

また、アンドレスの証言によると、シウァコアトルとテペウァの神像はシャルトカンに運ばれ、テスカトリポカとトピルツィン(Topilci/Topilitzin)³⁰⁾は、モテクスマの息子のアシャヤカトル(Axayaca/Axayacatl)³¹⁾によってクルウァカンのテクヨック(Tencuyoc)の洞窟に隠されたという。こうした事情をよく知っているのは、アンドレスの父親と同じように神像を管理していた父親がいたクルウァとナナナトラピシュケ(Nananatlapisque)だと指摘している。

また、次のような興味深い証言も行なっている。モテクスマの死亡後、1521年8月の戦闘の際、トラコパン領主のドン・ペドロ・テトレパンケツァツィン(Tetepanquetzal/Tetlepanquetzatzin)は、大神殿の上にあったナウアルテスカル(naualtezcal/nahualtezc atl)=「神託の鏡」³²⁾と呼ばれる鏡を取り外した。テスココ領主カカマツィン(Cuanacotzi/Cacamatzin)、アスカポツァルコ領主オキスツィン、そしてテノチティトラン領主クアウテモックをまじえ、神殿の脇で今後の成り行きを占うための儀式が行なわれた。トラコパン領主が呪文の言葉を投げかけると、鏡は黒く濁り、平民の姿はまったく映らなかった。トラコパン領主は泣きながら、「神殿から下りなければならない。我々メキシコは敗ける」とクアウテモックに告げたという。

これ以外にも、彼らの証言にはいくつかの興味深いエピソードがある。アンドレスの父パパロテカトル(Papalotecatl)は、メシカ最後の領主モクテスマの有力な側近だった。スペイン人が到来する3日前、チャルコ地区の属邑ママルウァソカン(Mamachautzuca/Mamalhuahzocan)で、モクテスマはアンドレスの父などと会見したという。アンドレスの父親が持参した神々の描かれた本を参考にして、進軍してくるスペイン人を阻止するための対応策を協議したのである。結果、チャンティコ(Chantico)に生贄を捧げることになった。翌日、モクテスマの息子チマルポボカとアンドレスの叔父のネシュパネカトルが、一人の若者をチャンティコの生贄として捧げ、スペイン人がやって来る場所に埋めたという。征服地に赴く場合、チャンティコの脚から筋肉を剥ぎ取って持参すれば、征服予定の土地に打撃を与えられると、メシーカのあいだでは信じられていたからであるという³⁹⁾。

さらに、バルタサールとアンドレスは、耳にしたことのある偶像の隠匿場所や儀礼の崇拜の様子について情報を提供している。また、そうした偶像の隠匿場所を管理していた老人たちの名前も挙げている(表4参照)。4ヵ月半前、クルウァカンの警吏アントンは、そうした洞窟の一つテロストテ(Telostote)に隠されていた6つの箱を発見し、金やヒスイの鑲められたチェーンや宝石類をバルタサールや仲間とのあいだで分配したという。メキシコ市とコルウァカンにおける異端審問記録に登場する偶像は、スペイン人の到来時に、先住民関係者によって摘発を避けるためにわざわざ隠匿された重要な偶像である。

表4 コルウァカンの有力者たちの証言した偶像隠匿場所

場所	神格	場所	神格
Puxtlán	Macuyl Masicual(人の皮をまとう)	Suchicalco	Macuyl Tunal
Yluycatitlán	Yzmain、Corazón del Cielo	Ecanago	風の神
Tetenmapan	四つの偶像	Madaluca	不明
Tecanalcango	ChalmecatI,Ecinacatl	Acacinango	悪魔の品
Talchico	ウィチロポチトリ、ケツアルコアトル	Centeupan	悪魔の品
Uchinabal	金製の太鼓、宝石のついたほら貝	Tlazaltitlan	水の神、Huehuetl
Yatlvaca	バラ園の一角、トウモロコシ畑を荒らす虫が出たので封鎖	Chaloztoc/ Tlaloztoc	水の神

しかし、異端審問当局がこれらの隠匿された偶像を実際に発見できたかどうかは不明である。ミゲル・ポチテカトルに対する異端審問当局の裁定が下されたのは、コルウァカンでの事情聴取が終わった後の11月11日だった。その後も上訴が繰り返され、懲罰執行が行なわれたのは1540年5月21日で、その後はメキシコ市内のサンフランシスコ修道院に収容された。修道院で記憶を取り戻し、偶像の在り処について思い出すようにせよという指示があることから、行方不明のウィチロポチトリの偶像などは見つからなかったと推測できる。

IV 摘発された偶像と執行された儀礼の実態

本来、偶像崇拝行為を摘発する任務は、異端審問当局を担っている修道士などの宗教関係者のものであった。だが、町や村に派遣された在俗の助任司祭、王室派遣の役人コレヒドール、さらには徴税権などを保有するエンコメンデロも積極的に摘発活動や情報提供を行なっている。スペインの様式に基づき生活することを選択した先住民のなかには、先住民の異教時代の生活様式と深く結びついた行為を行なっている先住民の情報提供や告発を行なう者もいた。修道士のもとで教育を受けた先住民子弟、教会ミサに参列するピリウアリたち、スペイン人当局に警吏として任命された若者などがそうである。

偶像崇拝者として先住民が異端審問当局に告発される状況には、大別して二つのパターンがある。一つは、前章で紹介したメキシコやコルウァカンの事例のように当局によって展開された偶像崇拝の探索・摘発の過程で発覚するものである。もうひとつは、「異教徒の偶像」や先住民の行なう「昔からの儀礼」にたまたま遭遇した情報提供者によって告発されるというパターンである。

1. 偶発的に発覚した伝統的儀礼

異端審問記録で言及されている偶像の名称は、偶像を保管し儀礼を行なっていた長老などによってもたらされたと思われる。トラナコパンの場合は、「テ

オレタタオ(*teoletatao*)と呼ばれる説教師(predicador)、「神殿の神父」、であり、メキシコ市の場合は、「悪魔に関連する万端を仕切る預言者」、オクイトウコの場合は、「太陽と悪魔の祝祭の計算係(contador)」と呼ばれる人物などである。

対象事例で言及されている先スペイン期の神々のなかで(表5参照)、先スペイン期にメヒコ中央部で最も崇拝されていたはずのウィチロポチトリが、現実の儀礼執行の場にあったと言及されている事例は意外に少ない³⁴⁾。一番よく言及されているのはテスカトリポカとトラロックであり、ついでシウコアトルとチコメコアトルである。メシーカの部族神ウィチロポチトリがメキシコ中央部の先住民のあいだでもっていた威光は、20年弱の植民地統治の期間に下落したといえよう。一方、前記の四つの神々は、農耕という植民地期も同じ形で営まれていた先住民の日常生活と密接に結びついていたため、キリスト教関係者の厳しい監視体制のもとでも、先祖伝来の「異教的儀礼」の不可欠な要素として活用されていたと推測できる。

表5 異端審問記録で言及されている偶像 (摘発、隠匿)

地区	偶像の名称
トラナコパン	9 ídolos grandes
アスカポツアルコ	Huitzilopochtli, Cialeuque(Coatlíque o Citlalaníque), Tlalocateotl, Cihuacóatl, Tlamatzinca, Tezcatlipoca
<コルウァカン>	Cihuacóatl, Huitzilopochtli, Tezcatlipoca, Tepeua, Topiltzin, Quezalcóatl, Huehueteotl, Thlathlauque, Ecinacatl, Chantico Yzmain(Itzmalli), Chalmeacatl, Macuilmasiciual, Macuil Tunal dioses de agua(Tlálóc), corazón del demonio, corazón del cielo, figura del viento(Ehécatl), Tochiuyc, Nualtezc atl, 4 demonios
<メシコ>	Huitzilopochtli, Tezcatlipoca, Cihuacóatl, Tescpuchtli, Tlatlauque Tezcateeopa, Tepegua. Chananquiytl Malinaci
テスココ	Tlálóc, Quetzalcóatl, Chicomecóatl, Xipe, Cozacuauhtli, Cóatl Cuauhtli, Tequacuilli, Cuahnacatl, Teocalli, Tecóatl, Teocalli
マトラトラン	Chicueyozumatli (5 mono)
イскарール	Altepetlyulo (corazón del pueblo)
オクイトウコ	Tezcatlipoca, Cihuacóatl, Tlálóc, Chicomecóatl, Macuilxóchitl Corazón de la comida, Cuzuaque, Yaoitl, Ycnopili, Coamiauatl
ウァチナンゴ*	Telpuchtli Tezcatlepuca
テペアカ**	Camaxtli(Camastecle)

< >の地区では、偶像の情報のみ報告。ゴシックは発見され焼却された偶像。

* ウァチナンゴはミシュコアトルの活動地域 **テペアカはオセロトルの活動地域

テスカトリポカに関する儀礼の具体的内容は、アスカポツァルコの事例やトゥランシンゴ北部でミシュコアトルが行なっていた儀礼から知ることができる。1538年11月に発覚したアスカポツァルコの例では、3名の若者が長老の命令で100日間、テスカトリポカのための苦行を行なった。その目的は良い収穫をもたらすようテスカトリポカに祈願するためであった。また、トゥランシンゴの北部地域で自ら神の化身と称していたミシュコアトルは、「皆、集まれ。テルポチトリ・テスカトリポカ様がおいでだ。お供えを持参せよ。コパール、神、ゴムを持参せよ」と弟子たちに広報させ、訪問地の領主たちも、「皆、喜ぶがいい。テルポチトリ・テスカトリポカ様は雨が降ると言われた。我々はたくさんのトゥモロコシを収穫できる。雹も降らないので収穫が台無しになることはない」と触れまわっていた。ミシュコアトルがテスカトリポカの名目で行なっていた儀礼が豊穡祈願であったことは明白である。

一方、雨の神トラロックに対する儀礼に関しては、アスカポツァルコとテスココの事例で言及されている。テスココの場合、東にあるトラロック山頂付近で、東側山麓に位置するウエショチンコやトラスカラの人々が、3月に作物の豊穡儀礼、5月の半ばに雨乞い儀礼を執行していたことが報告されている³⁵⁾。

こうした伝統的な農耕儀礼が露見したのは、多くの場合、たまたま行なわれていた農耕儀礼の場に情報提供者が出くわしたためと考えられる。トゥーラ北部にあるオトミーの集落トラナコパンの場合、住民にキリスト教を教える目的で6月26日に村を訪問した二人のスペイン人(エンコメンデロと元コレヒドール)が、村に人がいないことに気づいたことがきっかけだった。おそらく二人のスペイン人は、聖フアン・パウティスタの祝祭日(6月24日)に関連するキリスト教式の儀式を行なおうとしたと思われる。しかし、村人たちは、山中の洞窟で行なわれていた雨乞い儀礼に早朝から参加していた。現場に急行したスペイン人たちは、会場に設営された祭壇に生贄として捧げられ、脚から血を抜かれていた二人の青年を救出している。

2. 農耕サイクルと関係する儀礼

異教的な儀礼に関係しているとして報告され、摘発されている偶像の大半は、征服戦争への出陣式や戦勝記念式典、神殿落成式や領主就任式、国家運営と関連する重要な儀式と関係している神々の偶像ではない。表5から類推できるように、多くは食糧生産のための農耕と結びついた儀礼に関連していることが推測できる神々である。対象とした異端審問記録のなかで、占いを除く何らかの儀礼について情報が記載されているものをリストアップしたのが表6である。一見して明らかのように、半数以上が雨乞いや豊作祈願といった農耕儀礼である。次いで病気の治療儀礼、死者を巡る儀礼となっている。いずれも、先住民社会における日常生活において不可欠な儀礼である。しかし、病気治療や新築、結婚といったものが、個人レベルでの儀礼として執行されるのに対して、農耕儀礼は共同体レベルで行なわれることに大きな違いがある。

表6 露見した儀礼とその内容

農耕儀礼関係				
場所	儀礼執行者	日時	儀礼	内容
トラナコパン	Tanixtle/ Tacatecle	6/26	雨乞い	紙、棒、棘、コパール、石刀、羽毛、煙草、プルケ
テペアカ	オセロトル	5月	豊作	カマシュトリの供物のマントなどを参列者に分配
テスココ北部	ミシュコアトル	5月初	雨乞い	焚火、コパール、紙
トゥランシンゴ		6月初	雨乞い	焚火、コパール、紙
ウァウチナンゴ		7月初	雨止め	焚火、コパール、紙、ゴム
		9月上	洪水	焚火、
アスカポ ツアルコ	アトナル	5-9月	豊作	若者100日苦行、テスカトリポカへのお供え
テスココ	オメトチツィン	6/3	雨乞い	Axpanの泉、紙やゴム奉納
トラロック山	ウエショチンゴ/ トラスカラ住民	4月 5月	豊作 雨乞い	山頂での供物、紙、ゴム、コパール、鶉
その他の儀礼				
オクイトウコ	有力者数名		結婚	
	カシケ夫妻		治療	鶏犠牲、コパール。
メキシコ市	オセロトル		治療	ヒスイ使用の接触呪術
マトラトラン	Martín Utli		治療	80日断食
	カシケ	11/16	死者	鶏、犬の犠牲。広場に大木。
イグアラ	カシケ		死者	広場でボラドール
	カシケ	灰の水曜	新築	4つの焚火

異端審問の記録に記載されている農耕儀礼の多くは、春先から盛夏にかけて行われる農作物の成長を保証するための儀礼である。春先の豊作祈願や雨乞い、夏の雨不足による日照りや洪水による作物被害の防止が主目的となっている。一方で、秋の収穫感謝儀礼に関する情報は皆無である。また、地理的に見ると、メキシコ市などメキシコ盆地の中心部からは、こうした異教的な農耕儀礼についての報告は出されていない。表6にあるものは、メキシコ盆地の北縁部に位置する現イダルゴ州や東側の現プエブラ州に位置する地域からである。いわばキリスト教の浸透の度合いも低い周辺地域の共同体からの報告となっている。

伝統的な農耕儀礼をしようとしたのは、必ずしも伝統の保持者である長老たちとはかぎらない。オトミーの居住するトラナコパンの場合、本来雨季が始まっているのに雨が降らなかったため、6月下旬に雨乞いを行なっている。その儀式のイニシアティブをとったのは若い世代だったが、実際の儀礼執行に当たっては長老たちが指導していたようである。

一方、アスカポツァルコの事例では、豊作を祈願するために、選ばれた若者が、夜中に祭神テスカトリポカにお香やコパールを備えるという100日間に及ぶ異教時代の苦行を行なっていたという。苦行の満願日にはテスカトリポカに捧げられたトルティージャが「祝福されたパン」として人々に分配された。また、7月にはカシケの家にトラロックの像があったのを目撃したという証言もある。こうしたことから、5月から7月にかけての100日間行なわれていた若者の苦行は、先スペイン期のトシュカル(Toxcal=現在の5月)の黒いテスカトリポカ、翌月のエツァルクアリストリ(Etzalcualiztli)のトラロックへの祝祭において行なわれていた神官たちの苦行との関連性をうかがわせる³⁶⁾。

その一方で、伝統的な農耕儀礼のあり方にキリスト教の影響が及んでいることが推測できる事例もある。植民地期の当初から、キリスト教の布教活動が行なわれていた場所では、雨乞いの儀礼などはキリスト教の方式で執行されていた。カトリック神父たちも先住民の希望や要請に何とか応えようとしていた。1528年、トウモロコシ畑への被害や家屋に被害をもたらした長雨を終わらせる

ために、モトリニア神父はテスココで聖母マリアと聖アントニオの聖人像行進を組織した。すると雨が止み、改宗した先住民たちはキリスト教への信頼を強くしたという(Motolinía 1971:119)。また、1539年のラ・トリニダーの日(6月1~3日)、チコナウトラでは、アントニオ・デ・ラ・シウダー・ロドリゴ神父の指示で、雨乞いのための行進、お祈りと訓練が行なわれていた。村を訪れていたテスココ領主ドン・カルロスはカトリックの儀式の有効性に疑問を呈し、雨乞いのためには紙を用いた伝統的な儀式が必要であるとこぼしたものの、伝統的な雨乞いの儀礼を実行するにはいたっていない。

こうしたキリスト教的な儀礼の要素を取り込んだ新しい形の農耕儀礼を執行していたのがマルティン・オセロトルである。彼はテペアカ地方の領主たちを集め、自宅の地下室で5月初旬に行なった。その際、オセロトルは修道師たちの許可を得て儀礼を執行していると参加者たちに告げていた³⁷⁾。彼は、今年は雨が少ないので果樹栽培などで対応するよう指示し、カマシュトリに捧げるためのマゲイ製のマント2着、彩色された葦の筒と花を彼らに配っている。この儀礼においては、葦の筒とともに祝福を与えられた「両端に十字架の付いた彩色された櫛状の棒」が領主たちに配布されていた³⁸⁾。

その一方で、テスココ北東部を活動の舞台としていたミシュコアトルは、伝統的な農耕儀礼を強固に継続していた人物と位置づけることができよう。5月末から6月初めに雨乞い儀式を執行する一方で、6月末から7月初めにはトゥモロコシ畑への被害を止めるために雨止めの儀式も行なっている。また、ミシュコアトルの威光を無視した領主に懲罰を加えるため、大量の雨、雹や霰を降らせ洪水を起こし、農作物に多大な被害をもたらしたとも言われている。一連の儀式では、大きな炉(tlesmaitl)に大量の紙、コパール、煙草の葉、ゴムで作られた偶像など³⁹⁾が投じられ、両手にオウムの羽飾りをもったミシュコアトルは雨の神トラロックへのお祈りの言葉を唱えていたという。雨、雹や霰を操作できるミシュコアトルは、ナウアトル語でテシウトラスキ(teciuh tlazqui)、あるいはテシウペケ(teciuhpeque)と呼ばれるグラニセロ(granicero)であったと言

えよう(Sahagún 1988:486; Ponce et al, 1987:10)。

また、1539年5月頃には、ウェショチンゴやトラスカラの住民がトラロック山頂で雨乞い儀礼を行なった形跡が発見されている。そこには、コパール、ゴム、紙、煙草の葉、羽毛、鶉、トウモロコシやチア、アマランスの実、マント類とともに、雨の神トラロックと結びついたヒスイやほら貝も発見されている。また、トラナコパンのオトミーの住民が行なった雨乞い儀礼では、新設された祭壇には唐辛子や塩を絶つ断食を行なった二人の若者の脛の血が注がれていたという。さらに、木、紙、マゲイの棘、コパール、石刀、偶像の衣裳、羽毛、煙草の葉やお香、プルケ酒、食事やカカオが捧げられた。参加した住民は紙でできた神々の像を納めていたという。この儀礼の様式や供え物などは、現在のプエブラ州北部山地やワステカ地域南部の先住民が行なっている雨乞い儀礼と極めてよく似ている(Sandstrom y Sandstrom 1986:100-106)。

ミシュコアトルが洪水を起こしたという9月の儀礼を除き、異端審問記録に記載されている農耕儀礼のほとんどは3月から7月に行なわれている。トウモロコシなどの作付け開始、あるいは成長の時期の雨不足は、天水農業にとって大問題である。それは個人的な問題ではなく、共同体全体の問題であり、豊作祈願や雨乞い儀礼は必然的に共同体単位で行なわれるものとなる。しかし、共同体の内部にキリスト教的生活様式を受け入れた生活をする人物がいれば、伝統的な神官によって執行される雨乞い儀礼などは、偶像崇拜という異教的な儀式として告発される可能性が高くなる。

3. その他の儀礼

プエブラ州のトトナカ地方やゲレロ州のイグアラ地方からは、ボラドールの儀礼が行なわれていた証言を得ることができる。どちらも死者に対する儀礼と密接に結びついていた。オルモスの報告によると、マトラトラン地区の多くの村では、11月中旬、ナウアのパンケツァリストリに相当する祭りが一種の降臨祭(pascua)として行なわれるという。その祭りは、「一の葦」の日に行なわれ、チ

クエイオスマトリ(Chicueyozumatli=5の猿)が祭神となっている。トトナカ語でカルクソット(calculusot)と呼ばれる祭りでは、カシケの家では祝宴が行なわれ、死者のために鶏が生贄にされ、鶏や犬が埋葬されることもあった。この祝祭では、広場の中央に大木が設置され、樹上に「悪魔のシンボル」が飾られていた。

現ゲレロ州に位置するイグアラでは、領主フアンは、妹の死に際して、室内に妹の彫像を飾り、カカオ、プルケ酒などをささげ、庭に大木を設置し、ボラドールの儀式を行なっていた。コパールや花が捧げられた大木の周りでは、舌や耳から血を出した若者がボラドールの踊りを行なっていた。この二つの死者に対する儀式の事例では大木が設置され、イグアラの場合はボラドールの踊りが行なわれていた。16世紀の年代記では、死者のためのボラドールの踊りは8月のショコトル・ウェツイ(Xócotl uetzi)に行なわれたとされているが、マトラランの場合は11月に行なわれている⁴⁰⁾。

これ以外に、結婚式、家の新築、病気の治療などにまつわる儀式に関する記述が異端審問の記録のなかに見いだせる。このうち、カトリックの宗教関係者の職能と関連が深かったのは、いうまでもなく結婚の儀式である。「女性の要請者」と呼ばれる結婚の媒介人(tecihuatlanque)が、異教時代と同様に鶏などの贈り物を受取っていたことは、カトリックの宗教関係者にとっては目障りであったろう。イグアラで報告されている新築儀礼では、4つの焚火にコパールを投じ、鶏の血を壁に塗りつけ、新築の家の安全を祈願することが報告されている。当然ながら生贄になった鶏の肉は調理され、参加者に分配される。興味深いことに、その儀式は「神父たちのやっている方式」に準拠していると、領主フアンが参加者たちに説明している。プエブラ州北部のトトナカ地方で報告されている病気治療のための儀式では、80日間の苦行の最後の日、鶏を生贄にし、家の周辺の道にある「悪魔の道」に松やゴムを捧げ、大量のプルケ酒が住民に分配されたという。この記述はプエブラ北部山地のナウァ系の先住民集落で行なわれている「アイレ(aire)」に対する儀礼と酷似している。

V. むすびに代えて

異端審問記録に登場する先住民の行動様式が、植民地期初期の先住民全体を代表する典型的なものを見なすことはできない。実際、その行動パターンは多様であり、若い世代の行動様式にもかなりの差異がある。先住民社会の伝統文化を保持・継続するための教育を受けていた者もいれば、修道院での教育でキリスト教の教義や規範を受け入れ、先祖伝来の伝統を拒否する者もいた。

トゥーラの北にあるトラナコパンの事例が示すように、同じ共同体にこの両極に位置する若者がいたことも珍しくない。生贄にされかかった二人の若者は、先祖伝来の伝統を保持するために、長老たちが新しい世代に何を教授していたかについて興味深い証言を残している。偶像を護る職務(sacristán)を習得させるため、長老たちは若者に修行を課し、山中で耳などから血を抜く儀礼を行っていた。一方で、先祖伝来の伝統を拒否し、偶像を破壊し、近親者を偶像崇拜で告発する若者もいた。トラナコパンの長老は、スペイン人の当局者の側に立ち、修道院でキリスト教教育を受け、隠匿された偶像を探し回り、発見した偶像を片っ端から焼却している一部の若者の行動を批判していた。

そのような若者の例としては、メキシコ市の修道院で養育されたというカシケの息子、メキシコ市のミゲル・ポチテカトルの案件における伝統的神官の息子兄弟を挙げることができよう。偶像について知っている者がいれば申し出るようにという司教の説教を聴いた兄弟は、メキシコ市内の長老がテノチティラン大神殿から偶像を持ち出し、崇拜し続けていることを密告している。テスココ領主ドン・カルロスを告発し、メキシコ市内の多くの「預言者」が隠れ住んでいることを異端審問当局に報告したチコナウトラ村在住のフランシスコ・マルドナードはこうした若者の代表例である。

偶像崇拜の嫌疑による先住民への異端審問を扱った資料に含まれている情報には、農耕儀礼、とりわけ雨乞い儀礼と関係するものが多い。先住民の農民た

ちは、先スペイン期から現代に至るまで、作物の生育に不可欠な雨を確実に降らせようと腐心してきた。それゆえ、先住民たちは降雨を効果的に保証できると思われる伝統的な儀礼を継続して行なってきたのである。キリスト教関係者の監視網が巡らされていたメキシコ中央部では、伝統的の神官は注意しながら秘密裡に活動せざるをえなかった。マルティン・オセロトルのように、祭壇にカトリックの守護聖人を飾りつけ、カトリック司祭の許可を得ていると宣伝するなどの入念な対応策を講じながら、比較的大規模に雨乞い儀礼を組織化した神官も存在していた。一方、キリスト教があまり浸透していなかったプエブラ州北部山地のような周辺部では、伝統的の神官はある程度自由に活動でき、ミシュコアトルのように地域住民から神として扱われることもあった。とはいえ、先住民神官といえども地域住民の信頼を十分に得られたわけではなく、雨乞いに失敗したテペアプルコの神官は殺害されている。

また、異教的な儀礼の主催者はさまざまな物資をお供えとして受取っていた。トラナコパンやオクイトウコの領主は、受領したマントなどの一部を物資をエンコメンデロやコレヒドールへ納めていたとされる。また、オセロトルやミシュコアトルは、広範囲で儀礼を執行し、自らの下に集まった多様な物資を儀礼に参加した領主や住民に再分配していた。スペイン人到来後も、先住民社会で構築されていた物資流通のネットワークの一部は継続したと思われる。メシーカの主神のウィチロポチトリの偶像を秘密裡に隠し続けたネットワークには、洗礼を受けた先住民領主の一部とともに、ポチテカと呼ばれる遠隔地交易商人たちも関与していた。1539年にメキシコ市内などで繰り広げられた大神殿の偶像崇拜摘発の狂騒は、キリスト教強制などの植民地支配にもかかわらず、先住民社会の古くからのネットワークが一定程度保持されていたことを窺わせる。

注釈

- 1) カルロスに対する異端審問については小林(1995:第3・4章)を参照。
- 2) オアハカに関して、Sepúlveda(1999)の資料復刻と分析、ユカタン司教ランダの異端審問に関して、Scholes y Adams(1933)編の資料、Clendinnenn(1987)の研究がある。
- 3) この状況については、小林(1995:135-137)を参照。

- 4) テスココ領主カルロス・オメトチツインの異端審問にも、土地所有権をめぐる対立があったことは前稿で論じた(小林 1995:第4章)。司教テージョ・デ・サンドバル時代の1544~1546年、オアハカのヤンウィトランの先住民カシケに対する異端審問では、地域のエンコメンデロとドミニコ会師の利害対立や、土地所有権や市場開設権などを巡る地域内の利害対立があったことが確認されている(Sepúlveda 1999)。
- 5) 異端審問記録からの記述は、González Obregón(1912)編集の資料集に依拠している。ナワトル語の人名や神々の名は可能なかぎり本来の発音表記に基づいている。()内にイタリックで記したのは記録の表記である。タカテトルの記述は、“Proceso del Santo Oficio contra Tacatetl y Tanixtetl, indios, por idólatras” (González Obregón 1912:1-16)。
- 6) 本章の記述は、1539年の異端審問記録 “Proceso e información que se tomo contra Xpobal y su mujer, por ocultar idolos y otros delitos, y contra Martín, hermano del primero” (González Obregón 1912:141-175)、ならびに1540-47年のディエゴ・ディアの異端審問記録 “Fragmento de un proceso contra Diego Díaz, clérigo, por haber intentado levantar falsos testimonios a un indio, acusandolo de idólatra” (González Obregón 1912:221-236)、と “Extracto de los procesos seguidos a Diego Díaz clérigo, por amancebado, homicida y otros delitos” (González Obregón 1912:237-258)に基づく。
- 7) 当初、エンコメンデロに割り当てられたオクィトゥコは、1531年に王室の管理下に入るが、1535年~1544年は司教スマラガのエンコミエンダとなった(Gerhard 1989:94)。
- 8) 1547年のディゴ・ディアスの告白によると、経歴は次のようになっている。サント・ドミンゴに滞在していたディゴ・ディアスは、コルテスがスペインから戻った際、彼に同行してメキシコにきた。コルテスのお抱え司祭やメキシコ市の Nuestra Señora Concepción の救貧院付き司祭を経て、スマラガ司教の指示で、現ゲレロ州の中部のスパンゴ鉱山に司祭として派遣された。1年半司祭を務めたが、スペインに帰国したくなり、鉱山の司祭職を辞任し、1537年頃からオクィトゥコの司祭を務めていた。
- 9) 以下では、資料にあるインディオという表記をそのまま使う。
- 10) アステカの飲酒を伴う踊りを意味するミトーテ(mitote)は、踊り手を意味するナワトル語の mitotiani に由来する。
- 11) 資料では、ピリグアネホ(pilguanejo)という用語が使われている。この言葉はナワトル語の pilli(貴族)に由来し、聖職者の使用人、修道院で育てられた人物をさす。
- 12) 竜舌蘭から造った現地の酒ウクトリ(uctli)ではなく、葡萄酒が注がれていたとか、クリストバルは葡萄酒で酔っ払っていたという証言もある。
- 13) petlatl(ゴザ), icpalli(椅子)は、統治者、権力者のシンボルである。

- 14) 妻のカタリーナは、二つの神像はシウアコアトルとチコメコアトルとしている。
- 15) トラカテペック、テモアクはオクイトウコの南、シュミルテペック、テテラは北に位置する集落である。
- 16) 入札者は3名(入札価格は7、8、12ペソ)だった。鉱山の名前は明らかではないが、助任司祭ディエゴ・ディアスの前任地スンパンゴ金鉱山の可能性が高い。
- 17) ウアウトリ(雑穀アマランス)はウィチロポトリ神像を作る場合に用いられた。
- 18) 彼は異端審問当局の監獄から脱獄し、スペインに帰国後、インディアス審議会に上告し、許可を得て再びメキシコに赴いた。司教スマラガは1547年の書簡でヌエバ・エスパーニャの聖職者でいちばん期待に背いた人物と名指ししている(García Icazbalceta 1947:IV,224)。
- 19) 先スペイン期の18ヶ月の祝祭の日時や主要祭神などに関するデータは、基本的にはGraulich(1999)に基づいている。
- 20) 本章の記述は、“Proceso del Santo Oficio contra Miguel, indio, vecino de México, por idólatra” (González Obregón 1912:115-140)と“Información en contra de Don Baltazar, indio de Culoacan por ocultar idolos” (González Obregón 1912:177-184)に基づく。
- 21) 各偶像の神格・属性は次のとおりである。シウアコアトル(蛇の女)はメシーカの母なる神、テルプチトリはテスカトリポカの別格で若者の家の神、トラトラウキ・テスカトリポカ(赤いテスカトリポカ)は火の神、テペウァ(山の主)は大地の神格である。
- 22) 正確には、グアテマラではなくユカタン半島縦断によるホンジュラス遠征である。遠征に同行したクアウテモックらメキシコ中央部の主要な町の首長たちが、遠征の途次、反乱容疑で処刑されているが、マテオの父親らも処刑されたのかは不明である。
- 23) Nahuaci, Nanabaci, Cinagahuaci, Cinahuaciに該当するメキシコ市のインディオ首長は見当たらない。1530年前後はモテルチウァツィン(Andrés Motelchiuatzin)が首長だった。
- 24) フランシスコ・マルドナードについては、小林(1995:93-95)参照。
- 25) 第14代メシーカ首長ウァニツィン(Diego Alvarado de Huanitzin, 1538~41在位)は、就任前(1520~38年)はエカテペックの首長だった。
- 26) 1530年、アマケメカン・チャルコでアルモンテというスペイン人が、悪魔を崇拝する儀式で用いていた偶像の衣装の隠し場所について、二人の領主の局部に拷問を加えながら尋問したという記録がある(Chimalpáhin 1998,II:181)。
- 27) ポチテカトルはその名前から遠隔地交易商人(pochteca)であったと推定できる。ポチテカの崇拝していた神格はYacatecuhtliである。
- 28) この歌はCantares MexicanosのFol.42に所収されている(Garibay 1954:107)。

- 29) テノチティトラン陥落時にウィチリポチトリの装飾品類が持ち出されたことは『トラテロルコ年代記』にも記載され、シャルトカンのクアチルコ(Cuachilco)に移送されたとなっている(Tena 2004:121)。一方、当局の文書では、黒色と青色の偶像があり、シャルトカン、シロツテペック、テペツィンコに移送されたという。
- 30) アシャヤカトルはモクテスマ2世の2男で、次にでてくるチマルポポカは8男である。
- 31) このトピルツィンはケツァルコアトルを指す。
- 32) 将来を占う鏡は、スペイン人到来の予言について語られる場合にも登場する。この鏡は大きい円形のもので、トラコパン領主のものだったという。
- 33) チャンティコは炉の女神で、赤い顔とゴムを塗った唇をしている。戦争に出発する際、戦士たちは炉のそばで儀式をしていた。
- 34) メキシコ市の事例は、大神殿に安置されていたウィチロポチトリ像の行方に関する話である。アスカポツァルコの場合、ウィチロポチトリを「唇は血にまみれ、顔はヒスイで覆われ、部分的にはゴム、トルコ石のモザイクである」と異教的側面を強調したステロタイプ的な記述で、儀式についての尋問自体は行なわれていない。
- 35) ミシュコアトルの事例とトラロック山の雨乞い儀礼については、小林(1995:68-71、101-107)を参照されたい。
- 36) トシュカルの月には、炒ったトウモロコシでできた大きな紐の首飾をつけた若者による黒いテスカトリポカ像を掲げた行進が行なわれた(Durán 1967:I,37-45,255-256)。
- 37) キリスト教関係者の追求を避けるためか、オセロトルの自宅祭壇には、聖ルイス(8月25日)、聖ヘロニモ(9月30日)、聖フランシスコ(10月4日)の像が描かれていた。
- 38) トラスカラ地域で崇拝されたカマシュトリはメシーカのウィチロポチトリやケツァルコアトルに該当し、その祝祭は5月ではなく、現在の3月に当たるトラカシペウァリストリ(Tlacaxipehualiztli)に行なわれていた(Motolinía 1971:70, Graulich 1999:307-308)。祝福された櫛状の棒が掘り棒コアだったとすると、農耕具の祝福が行なわれる聖イシドロの祝祭(5月15日)との関連性を推測できる。
- 39) このような品物は、エツァルクァリストリ(Etzalcualiztli、現在の5月)に行なわれていたトラロックの祭礼でも用いられていた(Sahagún 1988:130)。現在でもワステカ地方のナウァヤオトミーの共同体で行われているチコメショチトル儀礼(3月)や雨乞い儀礼でも同じような品物が使われている(Sandstrom & Sandstrom 1986:100-106)。
- 40) ブローダは、トトナカ地域のこの儀式はメシーカのショコトル・ウェツィに該当する儀式と指摘している(Broda 1967:87)。

参考文献

小林致広

- 1995 『われらが先祖の教えに従って－1530年代テスココ先住民に対する異端審問記録の分析』神戸市外国語大学研究叢書第26冊

Broda, Johanna

- 1969 *The Mexican Calendar as Compared to Other Mesoamerican Systems.* Acta Ethnologica et Linguistica 15. Wien.

Cervantes, Fernando

- 1994 *The Devil in the New World: The Impact of Diabolism in New Spain.* Yale Univ. Press.

Chimalpáhin, Domingo

- 1998 *Las ocho relaciones y memorial de Colhuacan.* 2 vols, CONACULTA.

Clendinnen, Inga

- 1987 *Ambivalent Conquests: Maya and Spaniard in Yucatan, 1517-1570.* Cambridge Univ. Press.

Durán, Diego

- 1967 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme.* 2 tomos. Porrúa.

García Icazbalceta, Joaquín

- 1947 *Don fray Juan de Zumárraga. Primer obispo y arzobispo de México.* 4 tomos. Porrúa.

Garibay, Ángel M.

- 1953-54 *Historia de la Literatura náhuatl.* 2 vols. Porrúa.

Gerhard, Peter

- 1986 *Geografía histórica de la Nueva España, 1519-1821.* UNAM.

González Obregón, Luis ed.,

- 1910 *Proceso inquisitorial del cacique de Tetzoco don Carlos Ometochtzin.* Publicaciones del AGN, I (edición facsimilar, Biblioteca Enciclopédica del Estado de México, 1980).

- 1912 *Procesos de indios idólatras y hechiceros.* Publicaciones del AGN, III.

Graulich, Michel

- 1999 *Ritos azteca.* INI.

León-Portilla, Miguel

- 1974 “Testimonios nahuas sobre la conquista espiritual”, *Estudios de Cultura Náhuatl* 11.

Motolinía, Fray Toribio de Benavente

1989 *El libro perdido*. CONACULTA.

Sahagún, Bernardino de

1988 *Historia general de las cosas de Nueva España*. 2 vols, Alianza Editorial.

Sandstrom, Alain & Pamela Effrein Sandstrom

1986 *Tradicional Papermaking and Paper Cult Figures of Mexico*. Univ. Oklahoma Pr.

Sepúlveda y Herrera, María Teresa

1999 *Proceso por idolatría al cacique, gobernadores y sacerdotes de Yanhuitlan, 1544-1546*. INAH.

Scholes, France V. y Elenor B. Adams

1933 *Don Diego de Quijada Alcalde Mayor de Yucatán, 1561-1565*. José Porrúa Hermanos.

Tena, Rafael

1998 *Anales de Tlatelolco*. CONACULTA.